私の旅行カバン 第73回

# 海外留学を考えておられる方々へ：私の留学体験から

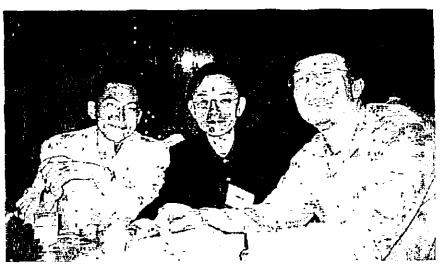
脳神経病態制御学講座 精神医学教授　尾崎　紀夫

学友会時報には、短期留学した在学生の報告や海外留学中の学友諸兄のリストが掲載され、皆さんの海外留学に対する関心の高さがうかがわれる。私自身も1990年から1995年までの5年間、米国 National Institute of Health（NIH）に留学したが、留学を思い立った時点で、関係する書物を読んだり、留学した方々に話を聴き、留学の時期やどの様に準備をしたら良いのかについて参考にさせていただいた。また、帰国してからは、留学予定の方々の相談を受け、皆さんの参考になればと思い、自分自身の留学経験についてお話ししてきた。そこで、「私の旅行カバン」の執筆依頼を受けた機会に、学友会時報の紙面をお借りして、私の留学体験をお伝えすることにした。

私は1982年に名古屋大学を卒業しており、留学開始時期は卒業後8年で決して早いほうではない。しかし、ある程度臨床と研究の経験を積んでから留学したことが、留学中の研究遂行上プラスに働いたと思っている。元来、私は学生時代から卒業後数年間、留学にあまり関心を持っていなかった。卒後しばらくして臨床と研究を並行して続けていくうちに、「一度研究に没頭してみたい。分子生物学的方法論を生かした精神医学研究ができないだろうか」という思いが徐々に強くなっていた。実際、アメリカに行って印象深かったのは、日本で尊ばれる継続性ではなく、「やりたいことがあれば、思い切って方向性を変える。そのための努力は惜しまない」というアメリカ人一般の姿勢である。この様な気持ちがあれば、留学を思い立つのが少しばかり遅くても良いように思う。

また、留学を思い立った直接的切っ掛けとして「グローバルなコミュニケーション能力の必要性」を感じたことが挙げられる。私が研究をしていた名古屋大学第一生化学教室に南カリフォルニア大学から Alexander 教授が共同研究で訪れ、私もこの共同研究に加わったことでこの「必要性」を感じた。数ヶ月にわたる共同研究の際 Alexander 教授と何度か議論することがあったが、私は英語で自分の論理を伝えることができないことを大変もどかしく思い、「アメリカでしばらく過ごせば、英語できちんと議論ができるのではないか」と考えるようになった。

実際、留学後は英語によるプレゼンテーションと議論の機会が、以下のような機会を通して増えた。第一に、ロータリー財団の Fellowship をいただいて私は留学したが、ロータリー Fellow の義務は国際親善であり、その役割を果たすため留学先で開かれるロータリーの会合に出席して出身地紹介のプレゼンテーションをする必要があった。留学早々、英語で日本文化や名古屋についてプレゼンテーションすることは気が重かったが、10回ほど経験を積むうちに少しずつ気楽にこなせるようになった。ロータリー財団の Fellowship で海外留学を考慮されている方は、この様な効用があることも知っておいていただくと良いように思う。



また、NIH では臨床研究プロジェクトに加わることになったが、自分の研究プロジェクトを遂行するには多くの臨床スタッフの協力を要した。直接の指導者である Dr. Rosenthal から「自分のプロジェクトを他のメンバーに充分に説明して、納得させなければ Norio のプロジェクトに関する協力は得られない」と言われ、これまた四苦八苦しながら毎週のカンファレンスで自分の研究プロジェクトの意義やデザインを再三説明することを重ねた。

この様な留学先でのプレゼンテーションと議論は貴重な経験になったが、留学前の自らを振り返ってみると、もともと日本で論理だった議論やプレゼンテーションの経験が不足していたことにも思い当たる。留学希望者の方々は、日本で経験を積んでおかれることが重要であろう。

私の留学期間が5年と長くなったのには、色々な要素があるが、「分子生物学的方法論を生かした精神医学研究」の可能性を模索しているうちに、時間が経ったことが大きい。当時、精神医学分野での分子遺伝学的研究は勃興しつつあったが、まだ色々な意味で整備がされておらず、倫理委員会の承認や臨床メンバーの協力によるサンプル整備といったことから始めざるを得なかった。また、手法的にも今ほど確立したものはなく、留学先の部門が臨床的部門であったため、共同研究を受け入れてくれる基礎的部門を探すこと、すなわち、臨床と基礎の架け橋をする役割を果たすことが私に求められた。NIH での研究には MD と PhD が参画しているが、アメリカの MD は一般的に実験室での経験が乏しく、一方、PhD は臨床経験がないので、両者の話が食い違うことが多い。その際、日本にいる間に「ある程度臨床と研究の経験」を持っていたことが役立つことになった。

最後に、私が留学で得た最大の成果は各国の人々とのつながりである。添付した写真は分子遺伝学的研究を手ほどきしてくれたLaboratory NeurogeneticsのChief, Dr. David Goldmanと、私の後、同じ部門に留学し、現在藤田保健衛生大学精神医学教室教授に就任されておられる岩田仲生教授である。多くの学友の方々が海外で貴重な体験を積まれ、今後に生かしていただくことを願って、この文章を終わることにする。